

河村瑞賢建設当時の酒田湊・御米置場

本間 勝喜

はじめに

江戸時代酒田湊に設置されていた御米置場については、いくつか絵図面などが残されており、それらによって位置、外観、配置などが知られる。それをもとに『酒田市史』をはじめ歴史書・研究論文等で御米置場について記述されているところが、これまで諸書で紹介されている絵図面はほとんどが近世後期に作成されたものと判断されるし、それ等を参考にして記述された御米置場の様子もまた近世後期のことであり、河村瑞賢が命じて建設された当時とは異なっていたはずであるが、その点の説明もなしに、あたかも瑞賢当時のままのように記している場合もある。

偶々、最近になって、御米置場を描いた一つの図面が瑞賢当時のものであると判定できたことから、小稿では、その図面をもとにして瑞賢が設置させた御米置場建設の経過やその姿がどのようなものであったかを述べたのである。

一、歴史書に記された御米置場

酒田湊・御米置場の規模や構造・配置、使用方法などについて、記した歴史書や論文等がいくつかあるが、そのうち

代表的なものの数点を紹介してみよう。

荒井太四郎『出羽国風土記』⁽¹⁾（明治十七年十一月頃の刊）では、

…寛文年より徳川幕府に於て米置場所となす、高燥の地にして東西百間余、南北六、七十間あり、外囲は木柵を構へ陣屋と唱ふ、其中を分け五河戸となす、一番は尾花沢河戸、代官担ひ、二番は漆山河戸、秋本家預り、三番は寒河江河戸、四番は柴橋河戸、共に代官担ひ、五番は大山河戸、酒井家預りなり、庄内・最上村山其他の収納米を此処に積置き海船を以て江戸・大坂等へ運漕す、之ヲ廻米と云ふ、米を積には地上に材木を置き其上に米を積み薦を覆て風雨を防く、数万俵の米苞を幾処にも積たるは偉觀なりき、此米の川下け、又海出をするに村々名主の内を撰抜して総代となし川船、海船の船頭へ受渡を掌らしめ江戸・大坂の藏前に納るを常法とす

とあり、御米置場は東西百間（約一八〇メートル）余、南北六、七十間（約一〇八、一二六メートル）あつたとする。周りを木柵で囲んでいた。御城米の出入りをするための門（木戸）が五つあつたやうで、それぞれが船着場である河戸に通じていた。一番は尾花沢河戸であり、村山郡尾花沢代官所付きの御城米用であり、同代官所の管理下にあつたし、二番は漆山河戸で、村山郡漆山代官所付きの御城米用であり、漆山領は山形藩秋元家の預地となつていたので、同家の管理下にあつたとするが、漆山領は寛政年間の数か年を除けば明和七年（一七七〇）より天保十三年（一八四二）まで米沢藩上杉家の預地になつていたもの⁽²⁾、天保十三年十月に山形藩領になつたことを誤つて記したものである。山形藩領という私領となれば御米置場は利用しないことになる。従つて、天保十三年以前のことを記したことになる。三番は寒河江河戸で村山郡寒河江代官所の御城米用であり、同代官所の管理下にあつたし、四番は柴橋河戸で村山郡柴橋代官所の御城米用であり、同代官所の管理下にあつたとする。なお、柴橋役所は宝暦五年（一七五五）に大山代官所の出張陣屋として設置されたが、同十年に代官所に昇格したものである⁽³⁾。五番は大山河戸で庄内幕領のうち田川郡米納五十カ村の御城米用であつたが、庄内幕領は明和六年（一七六九）より天保十三年（一八四二）まで庄内藩酒井家の預地であつた

ので、同藩の管理下にあったとする。なお、文化十二年（一八一五）に私領同様預地となつて江戸・大坂廻米が中止となつたので、それ以後は御米置場を利用しなかつたのである。従つて、『出羽国風土記』が記している御米置場の様子は明和七年と文化十二年の間ということになり、江戸時代後半のものであつたといえる。

なお、御米置場に屋根はなかつたので、同所に搬入された御城米は地面に置かれた台木のうゑに野積されたうえ、風雨を防ぐために筵（むしろ）や薦（こも）、苫（とま）で覆つたもので、数万俵に及ぶ米俵がいくつも積みあげられた眺めは偉観であつたとする。そして御城米の出し入れのため郡中のうちより名主を派遣させて担当させたとする。酒田出役名主であり、郡中村々の名主が交代で勤めた。

長井政太郎氏の論文「酒田港」昭和（八年）でも、御米置場について次のように記している。

瑞賢は来酒と同時に：日和山西麓の高燥なる地を選び東西八三間、南北五三間の露天の貯蔵場を造つた。是は五つの門扉を設け、下方の河岸に接して各棧橋を構え五河戸と称した。五河戸は、一は尾花沢、二は漆山、三は寒河江、四は柴橋、五は大山河戸と称し、一、三、四は各代官、二は山形藩主、五は庄内藩主が管理し、各其所属の米を木柵内に堆積するのであつた。野積で、苫で覆うに過ぎなかつたが、町倉に保管するよりは米質の変化が少なく、世に瑞賢倉と称された。

ここでは、御米置場の規模を東西八三間、南北五三間とする。そして、前出の『出羽国風土記』等を典拠にしたのであろうが、同所には五つの門扉（木戸）があつて五つの河戸と通じて、一番が尾花沢河戸、二番が漆山河戸、三番が寒河江河戸、四番が柴橋河戸、五番が大山河戸であり、そのうち尾花沢、寒河江、柴橋の三つの河戸は各幕府代官の管理であつたが、漆山河戸は山形藩主が管理し、大山河戸は庄内藩主が管理したとする。しかし、御米置場は出羽幕領御城米の江戸廻米のために設置されたのであり、当然私領の年貢米は対象外であつた。大名預地であれば利用されるが、漆山領の場合は天保十三年（一八四二）十月に山形藩（秋元家）領になつた以後には利用できないことになる。因に、漆

山領が山形藩の預地だったことはなかった^⑦。従って、漆山河戸を山形藩主が管理したというのは、『出羽国風土記』の記述を受けたのであろうが、長井氏は誤った解釈をしたため間違った記述をしたことになる。

それに、河村瑞賢による御米置場の建設に続けて、何の注釈もなしに五河戸のことを記していることから、この五河戸が瑞賢の建設によるもののように受取られる可能性が大である。しかし、前述のように、宝暦五年（一七五五）の柴橋出張役所を経て、柴橋代官所となるのは宝暦十年であり、「柴橋河戸」の呼称もそれ以後のことであるし、大山領を含めた庄内幕領が庄内藩の預地のもとで江戸・大坂廻米を行ったのは寛延二年（一七四九）の一カ年と明和六年（二七六九）〜文化十二年（二八一五）の間のことであったので、柴橋河戸が存在していたとする長井氏の記した御米置場は明和六年以降の近世後半のものであって、少なくとも呼称などは瑞賢が建設した当時のものとは異なったものであると判断される^⑧。たとえ、瑞賢の時にも五河戸が設けられていたとしても、柴橋河戸という名称の河戸があるはずもなかったのである。なお、御米置場に御城米を保管する利点として米質の変化が少ないという点をあげている記述が目される。『山形県の地名』（平成二年刊）における御米置場の記述は右の長井氏の論文をそのまま受けたものである^{⑨⑩}。

『酒田市史（旧版）』（昭和二十九年刊）では、次のように記述している。

御米置場は俗に瑞賢倉といい、その普請は酒井藩で勤めた。最上川にのぞんだ七・八十間四方を地ならしし、これに萱葺奥行十五間の倉庫二棟、幕府役人の詰所二棟・番屋二棟を建て、周囲に土居・空濠・木柵をめぐらした。この二棟の倉庫は屋根だけで、周囲を構えない土間であつたらしい。酒田並びに鄉村からの人足総数三万三百九十八人で、一日千三百人ずつを使役し、普請奉行・町奉行以下下役人として、鶴岡・鶴渡川原の足軽百四、五十人、酒田・郷中の大肝煎・長人が出役し、工事は約一カ月で完成した（承露盤）。

これによれば御米置場の規模としては七、八十間四方を整地したものとする。敷地内には萱葺で奥行十五間（約二七メートル）の倉庫二棟、幕府役人の詰所二棟、番屋二棟を建て、周囲に土居、空堀、木柵をめぐらしたとする。幕府役

人の詰所や番屋も萱葺だったものであろう。また倉庫は屋根だけとするが、なぜそのようにする必要があるのか疑問である。備品である台木などの木材、綱、碇などを保管するものとして、通常のように四方を壁や板で囲んだ倉庫として造作されていたとみられる。なお、幕府役人の詰所というのは各代官所より派遣された手代たちが日中に勤務し、夜に宿泊する施設であつたようである。番屋は各郡中より選ばれた名主たちが御城米の搬入・搬出や関係者の出入を監視するなどのため、同様に日中に詰めるとともに、夜間に宿泊するための施設であつたようである。なお、同書に掲載している御米置場図では、門は南側の新井田川・最上川方面に三つ、西方の日本海側に一つが描かれている。また門より水際まで四三間（約七七・四メートル）あつたとする¹²。それから、この図は瑞賢が建設した当時の姿に近かつたものとみられる。そもそも、御米置場も改築や移築があつたことで、立地条件などによって一様ではなく、時代によって規模や配置、呼称などに異同があつたようである。

『酒田市史 改訂版』¹³（昭和六十二年三月刊）は、三十数年を経て改定されたはずであるが、御米置場を次のように記述している。

瑞賢は、寛文十二年（一六七二）正月十七日、手代の雲津六郎兵衛と梅沢三郎兵衛を交互に酒田に差向けて、中町の二木九左衛門宅に宿をとらせ、準備をととのえさせた。御米置場は俗に瑞賢倉といい、その普請は庄内藩で勤めた。最上川にのぞんだ七、八十間（一二七・一四五メートル）四方を地ならしして、これに萱ぶきで奥行十五間（二十七メートル）の倉庫二棟、幕府役人の詰所二棟、番屋二棟を建て、東西一五〇メートル、南北八二メートルの周囲に土居、空濠、木柵をめぐらした。この二棟の倉庫は屋根だけで、周囲をかこわず、下は土間であつたらしい。湊に面して尾花沢、漆山、長瀬、柴橋、大山各御料地の五つの門があり、門から水ぎわまで七十八メートルであつた。酒田並びに郷村からかり出された人足総数三万三百九十八人、そのうち酒田からは一万二千九十九人で、一日に千三百人ずつを使役した。

間・尺にかえてメートルを使っているものの、『酒田市史 改訂版』の記している御米置場の規模、配置などは基本的に『酒田市史(旧版)』によって記述していることが知られる。しかし、そこに載せられていた御米置場図を無視するようにして、五つの門(木戸)の件だけが別に書加えられたといえるが、同じ五つの門・河戸といっても、前出の『出羽国風土記』や長井論文とはやや異なり、三番目の門・河戸を寒河江ではなく長瀬としているのが独自であるといえる。とはいっても実は、二年前の洪水のため御米置場が破壊されたため、酒田・本間家の三代光丘を御普請惣御用掛に任命して明和六年(一七六九)に新しい御米置場を建設したのであり、その際に設けられたのが尾花沢口、漆山口、長瀬口、柴橋口、大山口の五つであつたので、やはり近世後期の御米置場の姿を述べたものだったのである。

それにしても、長井論文と同様に、河村瑞賢による御米置場建設の記述に続けて、何の説明もなしに柴橋河戸を含む五河戸のことを記しているのであり、そのため、それらの五河戸が瑞賢当時から存在していたかのような誤解を与える可能性が大きく、甚だ遺憾とせざるをえない。関係史料などの発刊も多くなっており、再検討する余地は十分にあつたといえるが、全くそのような配慮がされたとは思えないのである。

参考までに本年(平成十六年)四月刊行の小説『夕映え酒田湊』は、酒田在住の作者伊藤浩一氏が、西廻り航路の刷新事業の真の主役が河村瑞賢ではなく地元酒田の加賀屋与助であつたように描こうとした意欲的な作品であるが、その中で、建設された頃の御米置場を次のように記していた。¹⁶⁾

川に臨んだ八十間四方の葦原をならし、この地に萱ぶきで奥行十五間の米蔵、幕府役人の詰所二棟、番屋二棟を建てるといふものであつた。そして東西八十二間、南北五十二間の周囲には土居、空濠、木柵をめぐらせた。

湊に面しては尾花沢、漆山、長瀬、柴橋、大山と最上川沿いに各々料地の五つの門があり、水際まで五十間の距離がある。右のように『酒田市史 改訂版』のままだに五河戸のことも記しており、伊藤氏が瑞賢の当時に五河戸があつたものと誤解していることは疑いない。しかし、これまで記したように瑞賢当時から柴橋などの呼称の五河戸があつたはずがな

いのである。しかしそれは、伊藤氏の責任というよりは、多くは歴史研究者の責任というべきである。その点からも、『酒田市史 改訂版』の安易な記述は残念であり、本来であれば書き直す必要があると考える。

前出の『酒田市史(旧版)』の記述は、基本的には「承露盤」十七という文書に依拠したものであったが、その文書には、宝暦五年(一七五五)頃のものともみられる御米置場の規模、配置等についての次のような記述がある。¹⁷⁾

御米置場南向(東西八十三間・南北五十三間)、西方土居から堀四方^間柵立^間囲有之(柵木数千八百四十三本、但大小立柱ともに)、御門四ヶ所、外二御門壹ヶ所(南方二四口、西方二一口)、御番所五ヶ所二在、御綱・碇入候小屋有之、台木小屋式ヶ所、御囲前二御高札場有之

間数などはともかく、門(木戸)が南方に四カ所、西方に一カ所あったこと、番所が五カ所あったこと、綱や碇を入れる小屋とともに台木小屋が二カ所あったこと、などが知られる。これからも門・河戸の位置や数が常に一定ではなく、時代によつて変化があったことが窺える。当然のこと、門・河戸の呼称も変化したわけである。なお、番所が五カ所ということとともに、代官所手代が駐在する詰所の記載がないことが注目される。

それまで出役中の手代や名主たちは日中ばかりでなく、夜間には詰所や番屋に宿泊して御米置場の警備等に当たっていたが、宝暦元年(一七五一)四月頃に、江戸にいた各代官たちよりの指示で、以後御米置場での宿泊が禁じられ、手代たちは酒田の町宿に宿泊することになったし、名主たちは西隣の高野浜村(現酒田市)に宿泊することになったので、詰所の記載がないのはそれに伴つてすでに撤去されたことが考えられる。

以上から、歴史書などにあたかも河村瑞賢当時からのものとして記述されている御米置場の姿が、ほとんどが近世後期のものであり、瑞賢当時の御米置場はそれとは別の規模や配置などになっていた可能性が大きいことをとりあえず指摘したものである。

二、御米置場建設の経過

(一)

出羽幕領の御城米の江戸廻米が始まるのは万治二年（一六五九）のことといわれ、当初は江戸商人らの請負による江戸廻米が行われた。例えば、享保三年（一七一八）九月に酒田・御城米浦役人二人が幕府・出羽代官三名にあてて差出した返答書「御尋ニ付申上候」⁽²⁰⁾には、

一、出羽村山郡最上御代官所御年貢米酒田湊江川下仕、江戸江相廻候義往古より御座候：御直廻已前ハ正木弥三兵衛と申者、海上請合を以江戸江運送仕、最上より川下之御米者酒田町蔵江入置申候ニ付、蔵敷米等従公義被為下置候：と記されており、請負商人として正木弥三兵衛の名前をあげているが、請負は年々の入札によって決められたものであり、請負商人は一人だけに定っていたのではなかったのである⁽²¹⁾。また江戸廻米となったのは村山幕領の御城米ばかりでなく、庄内・由利幕領の御城米も廻米されたのである。請負による江戸廻米の場合、最上川などの最寄りの川岸場で御城米を幕領村々より請負商人側で受取ると、予め傭っていた川船により酒田湊に積下すが、海船（廻船）の到着を待つために先の御城米浦役人の返答書にも記されているように、一旦酒田で蔵宿を営む商人の米蔵（町蔵）に保管したのであった。その際に請負商人の方より蔵敷料が支払われた。そして調達した海船が酒田湊に入湊すると、預けられている町蔵より湊まで御城米が運ばれて廻船に積込まれ、江戸に向けて出帆して、江戸に到着すると浅草などの幕府御城米蔵に納入されることになる。

右のような商人請負による江戸廻米は万治二年（一六五九）より寛文十一年（一六七二）まで十三カ年ほど行われたのであったが、請負商人たちは幕府より受取る請負料のもとで、なるべく多くの利益をあげるべく、老朽船を傭ったり、質の悪い船頭・水主を傭ったり、一度にできるだけ多くの御城米を運ぼうとして海船に積み過ぎたりと、種々の弊害がみられた。そのため海難事故が多発することになったし、事故にならなくても海船の到着が遅れたり、経費を省こうとして紛争を起したりと、請負廻米の過程で多くの問題が生じたのであった。²³ 幕府は江戸廻米における海難事故を少なくするとともに、江戸廻米の費用を削減するため、寛文十一年（一六七二）をもつて商人請負による江戸廻米を中止し、代つて百姓直廻し制を始めることにした。百姓直廻し制とは、幕府代官所や大名預地役所の指揮・監督のもとで、百姓たちの責任と負担により御城米の江戸廻米を行つて、速やかに幕府の御蔵に納入させるものであった。

そのため、幕府は河村瑞賢に命じて、寛文十一年に東廻り航路を刷新・整備させたのに続き、翌十二年に西廻り航路を刷新・整備させると共に、出羽幕領諸領の御城米を百姓直廻し制のもとで江戸廻米するしくみを整備させたのである。そのうち最も重要で核となる施設が酒田湊に建設された御米置場（瑞賢倉）であった。それについて、前出の享保三年（二七二八）九月の返答書「御尋ニ付申上候」では、続けて、

一、町蔵ニ御米有之候而ハ出火之氣遣も御座候由ニ而、寛文十二子年川村瑞賢老酒田江下被申、町外レ三丁程下浜之方ニ場所被見立、御困者酒井左衛門尉様より御普請被仰付²⁴…

と記して、商人請負の時には幕領村々より酒田湊に積下された御蔵米を一旦蔵宿の所有する町蔵に保管したのであったが、町蔵に保管するのでは常に火災の心配もあることから、御米置場を設置することにし、河村瑞賢が酒田に来て酒田の町家から西方に三丁程（三百メートル余）離れた下浜（高野浜）に設置場所を見立てた。そして御米置場の建設は庄内藩酒井家が命じられて普請を行つたとする。河村瑞賢の酒田下向については、御米置場の建設開始に先立ち、寛文十二年（一六七二）一月中旬頃にあったと記す史料もあるが、²⁵ しかし河村瑞賢は伴傳十郎を伴つて四月八日にも来

ているのは確実なので⁽²⁶⁾、わずかの間に二度も来酒したことになるが、ちよつと考えにくいことである。つまり瑞賢は一月中旬頃には自らは下向せず、代つて信頼できる手代を派遣したものとされる。瑞賢の指示を受けて、瑞賢の手代が酒田に出張してきて御米置場の建設場所の見立て、建設工事の指揮などを行ったものである。例えば、後年の享保十年（二七二五）と推定される日十一月に酒田町年寄三人が書上げた書付に⁽²⁷⁾、

一、川村瑞賢手代雲津六兵衛と申者子正月十七日酒田へ罷下、宿二木九左衛門方ニ罷在、御米野積可仕場所致見分、御普請初り候節も此方ニ罷在、正月末最上江御登代りに梅津三郎兵衛と申者江戸より罷下申候

とあり、瑞賢の手代雲津六兵衛という者が正月十七日（新暦二月十五日）に酒田に到着し、船宿の二木九左衛門方を宿舍にして、御米置場の建設が始まつてからもなお滞在したとする。建設作業も直接指示を与えたりしたものであろう。ところが何か用事が出来たものか、作業途中の正月末に最上（村山郡）に行くことになったので、代わりに同じ手代の梅津三郎兵衛という者が酒田に来たとする。完成まで同人が代つて工事の指揮をしたというのであろう。

前年寛文十一年（一六七二）に東廻り航路を刷新・整備した際に、荒浜（現宮城県亘理町）での奥州幕領御城米の積立差配のために瑞賢の部下四人が下調査を行ったが、その中に梅津三郎兵衛・雲津六兵衛もいたのであり、梅津・雲津の両手代は御城米積立てに関わる作業全般の経験者であつたし、瑞賢の信頼も厚かつたものであろう。

ところで、別の史料では⁽²⁸⁾、両手代の酒田下向について、

…寛文十二年壬子正月廿一日川村随賢手代六兵衛・三郎兵衛・六之丞与申者三人罷下、亀ヶ崎公義御米置場御囲出
来…

というように、雲津六兵衛、梅津三郎兵衛、ともう一人六之丞の三名が正月二十一日に揃つて到着したとする。手代がバラバラではなく、三人が一緒に来て御米置場建設の指揮に當つたとみるのが妥当であろう。なお、他の史料では⁽³⁰⁾、瑞賢の手代の名前を河村六郎兵衛、三郎兵衛、六之助の三名とする。三郎兵衛を除けば、少しずつ違っている。

手代たちは江戸で、御米置場の設置すべき場所の選定や内部の構造・建物の配置等について河村瑞賢より前もって指示を受けていたはずである。そのために瑞賢は庄内藩に依頼し酒田湊の絵図面や関係の情報をもつて入手していて、それに基づき設置場所を一応見立て、御米置場の配置の概略図を事前に作成していたものと思われる。そのうえで、派遣した手代たちに実地見分による最終的な決定権を与えていたものと推測される。

(二)

設置場所が決定すると、日程が迫っていたので早速建設作業が始まった。作業開始の期日については、次に示すように史料によつて三日の違いがある。まず、鶴渡河原（現酒田市）在住の足輕の「古手扣」^①には、

一、同（寛文）十二年子正月廿二日すいけん御蔵御ふしん被仰付…

とあり、寛文十二年（一六七二）正月二十二日のこととしているようである。もし雲津六兵衛らが前出のように前日二十一日に酒田に到着していたとすれば、翌日より早速建設が始まったことになる。少々ゆとりがないように思われる。それに対し、庄内藩の正史『大泉紀年』^②では、

一、正月二十五日より御取立…

と、「古手扣」よりも三日後の正月二十五日からとする。ここでは、正月二十二日に関係者一同が集まって打合せなどを行い、建設場所や内部の設計などの確認をし、同二十五日から実際の建設作業を始めたものと考えておきたい。

瑞賢手代たちの指揮のもと、実際に建設を担当したのは庄内藩（酒井家）であった。大名課役として幕府より命じられたものとみられる。「酒井家旧記」^③には、

…右野積之場所並野積之致様、川村瑞賢酒田江罷下、夫々差図有之…御家より御普請被仰付…

と、庄内藩が命じられて御米置場の普請を担当したことが記されている。なお、ここでも河村瑞賢が酒田に来て御米置場の建設を指図したとするが、瑞賢本人ではなく、同人の手代が代って指揮したと考えられることは前に述べた。また『鶴ヶ岡大庄屋川上記』³⁴⁾には、

…酒田浜ニ米積申小屋に而御普請、左衛門尉様より酒田御人足に而被成候…

と、庄内藩が御米置場の普請を担当したので、そのため酒田町々より人足を徴発したとする。庄内藩では普請の担当役人として次のような藩士を任命した。³⁵⁾

御普請奉行三浦七右衛門、細井松兵衛、御郡奉行柁津孫四郎、御歩行仙場彦右衛門、右御用懸り被仰付、四方柵を振候節ハ鶴岡より御普請奉行中村七兵衛茂罷出る…

右のうち三浦七右衛門・細井松兵衛の両人は酒田普請奉行であつたかと思われる。それに河北・平田郷を管轄する郡奉行の柁津孫四郎が加わっている。どうやら御米置場自体は酒田町の区域内であつたようであるが、周辺の土手、空堀などは平田郷の区域に所属したようで、そのため人足も酒田町ばかりでなく郷方からも徴発されたようである。右には記されていないが、そんな事情もあり酒田町奉行の中台式右衛門も担当役人になつていたようである。³⁶⁾

因に、普請担当役人を記した別の史料では、次のような名前が記されている。³⁷⁾

…右御用懸御郡代中村七兵衛、御郡奉行池野治右衛門、中村嘉兵衛、中台式右衛門、亀ヶ崎御普請方細井松兵衛、三浦与左衛門…

亀ヶ崎（酒田）御普請方として細井松兵衛と三浦与左衛門の名前があるが、三浦与左衛門は七右衛門の誤りと思われる。郡代中村七兵衛の名前もあるが、同人が郡代に就任するのは延宝四年（一六七七）五月からで、寛文十二年（一六七二）当時は普請奉行であつた。普請奉行であれば担当役人となつても問題はない。また郡奉行に池野治右衛門という者はいなかつたとみられる。³⁸⁾ 右の史料は後年の記述であつたので、あまり正確なものではないと判断される。以上のような担

当役人は上級藩士の御家中であり、その下に鵜渡川原在住などの足輕が大勢下役人として働いたのである。

荘内藩家臣たちを担当役人・下役人として建設が進められたが、実際に現場で建設の中心となったのは同藩の御抱え大工たちであった。御抱え大工棟梁であった小林瀬左衛門の延宝七年（一六七九）八月の「万御普請覚書」⁽³⁹⁾では、寛文十二年（一六七二）に実施した御普請の一つとして、

酒田御公儀御蔵屋敷柵木立

と、御米置場の建設のことが記されているし、同じ大工棟梁の余語家の記録⁽⁴⁰⁾にもほぼ同様の記事がある。酒田にも御抱え大工本間与左衛門家があつたので、おそらく同家も同様に勤仕したことであろう。荘内藩の担当役人の指示を受けて、大工棟梁が協力し、配下のお抱え大工たちを率いて御米置場の建設に当つたのであつた。お抱え大工たちだけでなく基礎工事や護岸工事、土居・空堀の普請などのために酒田町をはじめ荘内藩領民が多数人足として徴発された。鵜渡川原在住の足輕の「古手扣」⁽⁴¹⁾には、

…すいけん御蔵御ふしん被仰付、上下迷惑仕候、川北三組人足三万人程入申候よし：

と記され、領内のうち最上川以北の川北（飽海郡）の三組（平田郷、遊佐郷、荒瀬郷）から人足三万人ほどが徴発されたので、上下ともに迷惑したようだとする。なお、前出の酒田・本間家「御米置場修築」には、

…川北三組、川南共人数三万人積ニ而出来上り候由：

と、人足は酒田町や川北三組からばかりでなく、川南（田川郡）からも徴発されたようだとする。実際の人足の出方は次のようだったようである。⁽⁴²⁾

此人足三万三百九拾八人

内 壱万八千九十九人 郷中出方

内 壱万貳千九十九人 酒田出方

其節の役人三浦七右衛門殿、仙場彦右衛門殿、細井松兵衛殿、中台式右衛門殿毎日御出被成候、下役人鵜渡川原御足輕四、五十人斗、鶴岡百人者参候、酒田大肝煎不残、郷中大肝煎並長人・大杖突相詰申候

これによれば、徴発された人足は三万〇三九八人であり、そのうち郷中よりの人足が約六割の一万八〇九九人、酒田よりの人足が約四割の一万二〇九九人であつた。郷中よりの人足は川北ばかりでなく川南にも割当てられたものかと思われる。また、普請担当の役人である三浦七右衛門、細井松兵衛、中台式右衛門、仙場彦右衛門が毎日出役したとする。そして下役人として前述のように鵜渡川原の足輕四、五十人が働いたし、鶴岡の足輕百人が加わつた。また酒田の大肝煎六人、長人たち（三十六人衆）や郷中大肝煎、大杖突たちも詰めたとする。杖突とは御普請などに際して人足の監督をする役で、従つて大杖突は人足の総監督であり、大肝煎と同様に組合村ごとに置かれたものとみられる。

右のような三万人余に及ぶ徴発した人足は延べ人数であり、

一、御普請一日之出人足千弐、三百人ツ、出申候⁽⁴³⁾

というように、一日に平均して千二、三百人の人足が働いたとする。そうすると実質の工事日数は二十四、五日ほどということになる。右の人足は御米置場自体の工事ばかりでなく、当然ながら御城米を運ぶ川船が円滑に着岸できる施設の工事や御米置場を洪水から守るための水除普請にも多く振り向けられたようである。例えば、

一、外二水除仕候付、明表四万俵酒田在々より出し申候⁽⁴⁴⁾：

という記事もみられる。この場合、そのため明俵四万俵が酒田や周辺村々に割当てたとしている。酒田や鶴岡の町人などが多少なりとも田地を持ち稲作を行っていたからこそ大量の明俵の提供も可能だったのであろう。明俵の割当は城下鶴岡の町々に対しても行われた。すなわち、鶴岡大庄屋（大肝煎）の記録に⁽⁴⁵⁾、

一、酒田川除御普請付而、鶴岡御町中よりあき俵三千俵出申候、是ハ御台領御米江戸へまはし申し、江戸ノ御町人⁽⁴⁶⁾ついでと申仁、酒田ニて御米船ニて最上川下り申候御馳走二川⁽⁴⁷⁾よけ被仰付候、酒田川⁽⁴⁸⁾より人足五百人ツ、毎日出申

し、あき俵式千俵被仰付候、鶴岡より式千俵と御訴訟申上候、高橋孫左衛門殿其段被仰上候へハ酒田ハ五百人と式千俵出申候、当御町ハ御城下二候而人足ハ出不申、たわら斗⁽²⁾二候間三千俵と被仰付候、御尤と何れも町中申上候、但⁽⁴⁶⁾かち町・ひもの町・銀子町も惣□□にあき俵出申候、沓間屋⁽⁴⁷⁾より沓俵ツ、出申候

とあり、酒田よりは人足五百人と明俵二千俵を出したが、鶴岡の場合は人足を出さず、明俵のみ三千俵を出したとするものである。鶴岡は藩主の参勤交代の際や、鶴ヶ岡城の雪囲い等でしばしば多くの人足が徴発されていたために、この度は免除されたものか。ところで、別に次のような記事もある。⁽⁴⁸⁾

…御天領御米積出申候二付、酒田川湊二舟寄仕候普請二鶴岡御町中より五千俵三月中二積下申答ニ支度仕候…

と、三月中に鶴岡町中より明俵五千俵を積下すつもりで準備しているとするものである。初め三千俵ということであったが、それでは足りず、追加で二千俵、都合五千俵ということか。いずれにせよ、明俵とはいえ五千俵を鶴ヶ岡町々で提供するの結構負担になったことと思われる。

さて、御米置場建設工事の完成期日であるが、享保十年（一七二五）とみられる酒田町年寄三人の書上げによれば、⁽⁴⁹⁾
一、御米置場御普請御急ぎ被遊、正月半末より御取立、同二月半時分ニ不残出来仕候…

と記し、工事の始まりは「正月半末」とするので一応一月下旬とみられるが、大急ぎの工事だったので二月半ばには完成したとする。庄内藩酒井家の「酒井家旧記」⁽⁴⁸⁾でも、

…二月中旬迄ニ而不残出来す…

と記して、やはり二月中旬までに完成したとする。ところが、享保十年（一七二五）十一月に御城米浦役人二人が書上げた覚書⁽⁴⁹⁾には、

一、浜御城米御蔵屋敷御普請寛文十二年子正月二十五日始まり、同二月二十四日終ル
と記して、一月二十五日（新暦二月二十三日）に工事が始まり二月二十四日（同三月二十三日）に完成したとする。い

ずれにせよ約一カ月で工事が完成したとしていようであり、前述の手足の件とも符合するわけである。大変急がれた建設工事だったが、それは二月半ばを過ぎると村山幕領村々では最上川河岸場よりの御城米積下しの作業が始まり、順調な場合には第一船が二月末までに酒田湊に到着することもありえ、到着次第に御米置場に運び入れて野積する必要があつたからである。この年の第一船は二月二十四日に到着したようであり、ひよつとすると、工事が終了した日にあたつた可能性もあり、その点からも急がれた工事であつたことが明らかであろう。

御米置場が完成すると、瑞賢方より任命されたばかりの御城米浦役人や番人等に管理の責任が移されることになった。参考までに、後年の覚書に、⁽⁵²⁾

：御領主酒井左衛門尉様御普請被遊候：尤右二付為御修覆料、御高三千石従御公儀様別段御拝領之由ニ御座候とあり、庄内藩が御米置場の建設を担当したばかりでなく、その後の維持修理も担当することから、知行高のほかに修覆料として領知三千石を幕府より与えられたようだとするものである。しかし、大名課役として勤めたものであり、一時的に手当米が与えられたことはあつたとしても、領知を増加されるといったことはなかつたはずである。

参考までに、幕府は河村瑞賢には褒賞金として三千両を与えたといふ。⁽⁵³⁾

また、沖津常太郎「寒河江町史」⁽⁵⁴⁾によれば、寒河江の牛前舟場付近には、河村瑞賢による御廻米積出しのための瑞賢倉が設けられたとする。瑞賢の手代雲津六兵衛が途中最上（村山郡）に行く用事があつたのも、こちらの瑞賢倉との関係があつたものとも考えられるが、この「瑞賢倉」の建設はもつと後のものだつたようである。⁽⁵⁵⁾

三、河村瑞賢が建設した御米置場

歴史書などに紹介されている御米置場の配置等は、河村瑞賢が建設させた当時のものではなく、後年に改築されたりしたものであったことは前に記したところである。それでは、瑞賢当時の御米置場とはどんなものであったろうか。これまで、瑞賢当時の史料、図面などは残されていないと考えられてきたといえる。本当にそうであろうか。因に、『酒田市史（旧版）』収録の絵図面も元禄以前のものであったと判断される。

さて、庄内藩の御抱え大工の棟梁小林家が御米置場の建設に従事したことは前述したが、その小林家の所蔵文書のうちに酒田町や酒田湊に関した図面が数点残されている。その中に、年代が記されていない「酒田御蔵絵図」一点が含まれている。どうやら、この図面こそが河村瑞賢の指示で酒田湊に建設された御米置場についての図面であったと判断される。

その理由として、第一に、図面に二つの手代の家が描かれており、そのうち東側のものに「瑞賢手代家」と記されていることである。前述のように、雲津六兵衛、梅津三郎兵衛ら瑞賢手代たちが酒田に来て、初め船宿の二木九左衛門方に宿泊したが、御米置場の普請が始まり、整地の作業がまず行われ、それが済むと、直ぐに「瑞賢手代家」を建てて移り、それより工事が終了するまで宿舍として、御米置場建設の指揮に当たったものと推測される。そして、一カ月程で御米置場の建設が完了し、御城米が搬入されるようになると、瑞賢の手代たちは酒田を引払い、江戸などに戻ったものとみられる。それに伴い、「瑞賢手代家」として利用された家屋も、代って出役してきた延沢代官所の手代たちの詰所に転用されたものとみられる。

従って、未だ「瑞賢手代家」と記載されている図面は建設中の御米置場の姿を示しているものとみられ、その点から

この図面は設計図に相当するところの指図であるとみられる。⁵⁶⁾ この絵図に基づき御米置場が建設されたといえる。

理由の第二に、この図面には木戸が南側の最上川・新井田川側に三つ、西側に一つが描かれており、また南側の三つの木戸に対応するように「御米上ヶ所」、すなわち船着場（河戸）が川岸場に三カ所描かれている。つまり、南側の木戸三カ所が御城米の出入り口であり、西側の木戸一カ所は出張つて来ている代官所手代たち、郡中派遣の名主たち、御城米浦役人、番人等の通用口であつたものと判断される。それらは当時の御米置場の利用状況と一致するものである。

江戸廻米の直廻しが開始された当時、出羽幕領として置賜郡の屋代郷、村山郡の延沢領・漆山領、庄内（田川・鮑海両郡）の大山領・丸岡領、由利郡の由利領の六領が存在していた。⁵⁷⁾ そのうち、米沢藩預地となつていた屋代郡は阿武隈川を利用して荒浜に川下げし、それにより江戸廻米していたので、⁵⁸⁾ 最上川々口の酒田湊の御米置場を利用していなかった。

そのため、例えば、正式に百姓直廻しが開始された寛文十三年（一六七三）二月の幕府・勘定奉行の浦触れの冒頭に、⁵⁹⁾
一、羽州漆山・延沢・大山・丸岡・由利御領米為御城米江戸御蔵江相廻候儀、向後酒井左衛門尉・松平清兵衛・佐野平兵衛二被仰付候…

とあるように、屋代郷を除く五領が酒田湊より江戸廻米されていたわけである。因に、延沢代官（長瀬代官）松平清兵衛が延沢領と庄内・大山領、漆山代官佐野平兵衛が漆山領、を支配していたし、庄内藩が庄内・丸岡領と由利領を預地支配していたが、庄内藩預地の丸岡・由利両領は御米置場を利用せず、酒田湊の同藩米蔵を利用していたよう⁶⁰⁾で、結局のところ当時御米置場を利用していたのは村山郡の延沢領・漆山領と庄内の大山領の三領だけであつた。⁶¹⁾ なお、石高は漆山領三万石、大山領一万石に対し延沢領は十二万石余に及んでいた。⁶²⁾ 延沢領には、もともと寒河江領、谷地領、白岩領などの諸幕領が含まれていたが、例えば、松平清三郎代官（松平清兵衛の後継）支配地の天和三年（一六八三）亥八月付の江戸廻米に関わる経費を書上げた帳面を「延沢・大山領戊御年貢米亥ノ年江戸廻御城米納方並万入用帳⁶³⁾」と記していたように、当時松平代官の村山郡支配地を総称して延沢領と呼んでいたことが知られる。

そうすると、御米置場の木戸の呼称としては、やはり延沢、漆山、大山の三つであったことになり、先の図面の南側の木戸と「御米上ヶ所」（川戸）が三つずつであったことと符合しているわけである。

以上から、出羽幕領の御城米の江戸廻米を百姓直廻しするに当たり、河村瑞賢の企画で酒田湊に初めて御米置場が設置された頃の図面であつたと判断される。

そこで次に、この図面によつて建設された当時の御米置場について紹介してみる。

第一に、御米置場の周囲は土手が回らされており、土手の幅が四間（約七・二メートル）で、高さが七尺（二・一メートル）とする。図面では「惣間八拾間」に対し、「土居内法七拾八間」だったので、土手の分は二間となるので、土手の幅は一間となりそうであり、それに比べて四間というのは数字が合わないうえに少々幅がありすぎるようにも思われる。ともかく、土手の真中に柵木が立てられたが、

惣柵木数貳千百拾八本 但し四寸壹丈木

内貳百五拾八本 六寸貳間木

とあり、柵木は四寸（約一二センチ）以上の太さがあり、高さも一丈（約三メートル）ゝ二間（約三・六メートル）もあるものであり、大体二〇センチの間隔で立てられていたようである。

第二に、前述のように木戸は四カ所あり、そのうち南側が三カ所、西側が一カ所であり、木戸口はいずれも二間半（約四・五メートル）であつた。南側の木戸三カ所はそれぞれ「御米上ヶ所」（船着場）に通じていたが、木戸口より川端までは二十間（約三十六メートル）ほどであつた。なお前出の『酒田市史（旧版）』収録の絵図では、南側の木戸三カ所は一致するも、木戸より水際まで四十三間としているので、年代的には少し後のものと判断される。また当時、川面から御米置場までは二丈七尺（約八・一メートル）余も高くなつていたとみられ、そこで「御米上ヶ所」は何段かの石段となつていたか、あるいは利用する時だけ梯子をかけるようになっていたかと推測される。

第三に、御米置場の内側は、東西七十八間（約一四〇メートル）、南北四十九間（約八八メートル）であつたので、面積は、惣坪数三千八百貳拾貳坪

であつた。御城米はここに野積みされるので、大部分の所は屋根がないことになる。

第四に、御米置場の内部にはいくつかの建物があつた。これらの建物には屋根があつたが、前出のように『酒田市史』等では屋根ばかりで壁などがないような記述になつていた。しかし、備品などが保管されるので当然壁等で囲われていたはずである。

前述のように、南東の方に「瑞賢手代家」があり、三つの部屋と廊下などが描かれている。御米置場建設中には瑞賢の手代たちの宿舎として利用され、その後御城米の江戸廻米を指揮・監督するために出役した延沢代官所の手代たちの宿舎となつたとみられることは記したところである。それに対し、南西の方、西向きの木戸口に近く、「漆山・大山手代家」が置かれていた。四部屋と廊下などがあつたようで、やはり御城米の江戸廻米を指揮・監督するために出役した漆山代官所と大山役所の手代たちが宿泊したものとみられる。おそらく、江戸廻米となる御城米の量に応じて、出役する手代の人数も、延沢代官所が多く、漆山代官所、大山役所の順に少なかったはずで、それにより、支配違いであつたが、漆山代官所と大山役所の手代たちが同居する形になつたものであろう。

また、北側に番所三つが並んであり、三カ所とも二間（約三・六メートル）に一間（約一・八メートル）の間取りで、二坪の建物であつた。おそらく、各郡中より選ばれ出役した名主が番所として利用するとともに夜間に宿泊したようである。各郡中より二名程度が出役したものとみられる。

更に、西側に「漆山・大山手代家」と番所にはさまれて二つの建物があつた。どちらも十五間（約二十七メートル）に二間（約三・六メートル）で、建坪が三〇坪であつた。両方とも「御蔵」と記されているが、御城米を入れるのではなく、御城米を野積する際に必要である台木、筵、薦、苫や綱、碇を保管しておくための倉庫であつたとみられる。

ほかに、当時から稻荷社が鎮座することになっていたはずであるが描かれていない。

以上から、近世後期に改築された御米置場とは異なり、瑞賢によって建設された初期の御米置場は木戸口が三つであったことに特徴があったといえる。

当時の建物の土台や周囲は土や石砂によって固められていたために、最上川などの洪水によって常に欠崩れる危険性が存在していたことを銘記すべきである。また江戸時代の酒田はしばしば大火があつたのであり、御米置場も火災の危険から御城米を守るための施設であつたが、火災の難から完全に免れることはできなかった。そのため、御米置場も火災や欠崩れのために何度か改築や移築を余儀なくされたのであり、その度に御米置場の面積、構造、配置等に多少の変更が行われることになつたのである。また時代によって代官所の改変もみられ、それに伴つて木戸口の呼称も変化した。その観点から残されている御米置場の図面等を年代的に整理して行く必要があると考える。

結びに代えて

本稿では、河村瑞賢が行つた西廻り航路の刷新・整備に際し、酒田湊に新たに建設された御米置場について、工事の様子や発見した図面による構造・配置などを記述したものである。

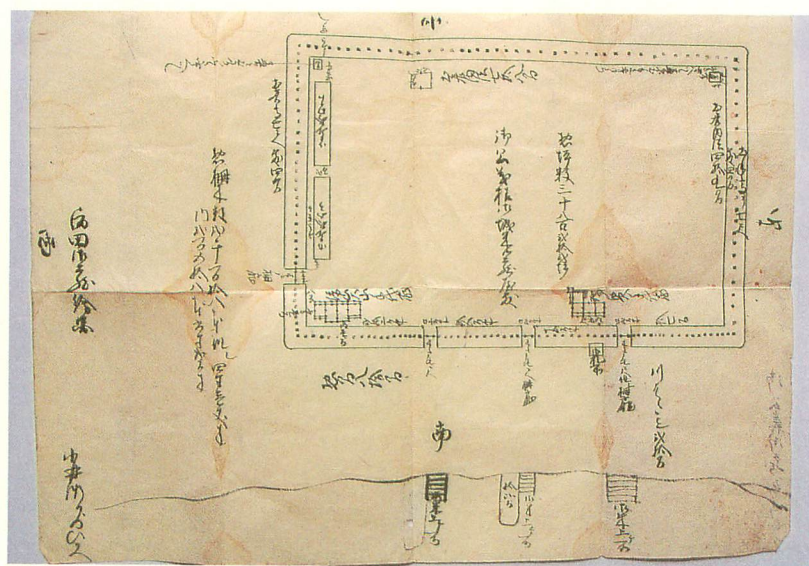
一言しておけば、『酒田市史』等に記述されている「五河戸」に代表されるような御米置場の姿は瑞賢当時のもではなく、火災や洪水による欠崩れなどのために近世後期に改築されたり移築されたりした後のものであつた。それらの認識を抜きにしての、御米置場の記述は誤解を与えるばかりでなく、その維持や改築等のために費やされた多大な苦労や莫大なエネルギーを無視することになるように思われるのである。

註

- (1) 荒井太四郎『出羽国風土記』（昭和五十二年復刻）
- (2) 『漆山県令編年記』解説（『山形市史編集資料』第二十三号）
- (3) 長井政太郎『柴橋村誌』、拙稿「宝暦期の大山代官兼柴橋代官天野市十郎」（『西村山地域史の研究』第十一号）
- (4) 拙稿「庄内幕領の『酒田御蔵納』—庄内藩私領同様預地における—」（東北公益文科大学『総合研究論集』一）
- (5) 『出羽国風土記』の記述は、文化四年の「酒田往来」（酒田市立光丘文庫）を典拠としているように思われるが、その通りとすれば文化初年頃の御米置場ということになる。なお、「酒田往来」は田村寛三『酒田遊所の賑わい』に収録されている。
- (6) 『大塚地理学会論文集』第一輯（後に長井政太郎著『山形県交通史』に再録）
- (7) 『漆山県令編年記』解説
- (8) 拙稿「近世後期庄内藩の預地支配（下）」（東北公益文科大学『総合研究論集』第六号）
- (9) 『高松村史』（共著）や『柴橋村誌』などの執筆を担当した長井政太郎氏がこのような記述をしているのは意外である。
- (10) 「日和山」（日本歴史地名大系第六巻『山形県の地名』平凡社）
- (11) 『酒田市史（旧版）』上一六九頁、なお工藤定雄氏の執筆である。
- (12) 『酒田市史（旧版）』上一六八頁
- (13) 『酒田市史 改訂版』上巻三六二・三六三頁、なお渡辺信夫氏の執筆である。
- (14) 『鶴岡市史』上巻三四四頁、『酒田市史年表 改訂版』一六八頁
- (15) 『酒田市史史料篇』（五）七四五頁
- (16) 伊藤浩一『夕映え酒田湊』一三〇頁
- (17) 『酒田市史史料篇』四、カッコ内は割注の部分である。
- (18) 「大口村御用留」（羽黒町大口、斎藤家文書）
- (19) 『酒田市史 改訂版』上巻三五七頁、なお古田良一『河村瑞賢』（三四頁）では寛文元年（一六六一）としている。
- (20) 『酒田市史史料篇』四、山形県史資料篇六『雞肋編』下巻
- (21) 拙稿「近世前期出羽幕領御城米の払方について」（『西村山地域史の研究』第二十二号）

- (22) 拙稿「近世前期庄内・由利幕領の江戸廻米」(酒田古文書同好会『方寸』第九号、後に拙著『近世幕領年貢制度の研究』第五章第一節として再録)、なお由利領では享保十年代に「永々松前渡」となり、江戸廻米が中止となった。
- (23) 古田良一『河村瑞賢』二四頁及び三四頁
- (24) 『雞肋編』下巻二七六頁
- (25) 鶴岡市史編纂会『鶴ヶ岡大庄屋川上記』上巻五九頁、なお「酒井家旧記」十(写本、鶴岡市郷土資料館)にも同様な記述がある。
- (26) 「承露盤」十七
- (27) 已十一月「覚」(「承露盤」十七)
- (28) 古田良一『河村瑞賢』二三頁
- (29) 『酒田市史料篇』(五)七五二頁
- (30) ・(31)『雞肋編』下巻八〇頁
- (32) 鶴岡市史編纂会『大泉紀年』下巻六九頁
- (33) 「酒井家旧記」十
- (34) 『鶴ヶ岡大庄屋川上記』上巻五九頁
- (35) 『大泉紀年』下巻六九頁
- (36) 「庄内藩湊御用控抄」(『酒田市史料篇』四)
- (37) 「御米置場修築」(『酒田市史料篇』五)
- (38) 役職は主として「重職歴任者一覧」(鶴岡市史編纂会『庄内史要覧』)による。
- (39) 小林家文書(鶴岡市郷土資料館寄託)
- (40) 「御大工棟梁余語所蔵ノ写」(『雞肋編』上巻)
- (41) 『雞肋編』下巻二八〇頁
- (42) ・(44) 享保十年已十一月「覚」(「承露盤」十七)
- (45) 『鶴ヶ岡大庄屋川上記』上巻四九頁
- (46) 『鶴ヶ岡大庄屋川上記』上巻五九頁
- (47) 「覚」(「承露盤」十七)
- (48) 「酒井家旧記」十

- (49) 「寛」（承露盤）十七
- (50) 拙稿「天和年間延沢・大山両領御城米の江戸廻米」（『西村山地域史の研究』第十七号）
- (51) 「寛」（承露盤）十七
- (52) 「酒田湊御制札写」（『酒田市史資料篇』三）
- (53) 『酒田市史改訂版』上巻三六四頁
- (54) 『寒河江市史編纂叢書』第五・六集
- (55) 寒河江市史編集委員・宇井啓氏の御教示による。
- (56) 小林家には庄内藩の諸御普請所の指図が多数残されている。拙著『近世前期羽州幕領支配の研究』序論「近世前期の出羽幕領と支配の概要」
- (57) 『山形県史』第二巻六六八頁、『米沢市史・近世編』（1）四八九頁
- (58) 『大泉紀年』下巻一〇一頁
- (59) 延宝三年丸岡領勘定書の江戸廻米について記載（『大泉紀年』下巻一六〇頁）などにもうかがえるようである。
- (60) 例えば、御米置場建設に際し、幕府より庄内藩への指示に、
「今度羽州延沢・漆山・大山公義御料米、自今以後川村瑞賢
与申もの二被仰付」（『大泉紀年』下巻六九頁）とあり、も
ともこの三領が対象であつたとみられる。
- (61) 拙著『出羽天領の代官』序章「近世前期の出羽天領と幕府代官」
柏倉文蔵家文書（明治大学刑事事博物館）、拙稿「天和年間延沢・
大山両領御城米の江戸廻米」
- (62) 例えば、明和五年とみられる五月「御米置場移築二付伺い（仮
題）」（致道博物館酒井家文書）



(注) 河村瑞賢建設時の酒田御米置場図（鶴岡市郷土資料館小林家文書）